A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

18

ドストエフスキイ

カラマゾフの兄弟 II　池田健太郎訳

中央公論社

世界の文学　18　©1966

ドストエフスキイ

訳者　池田健太郎

昭和41年3月1日初版印刷
昭和41年3月10日初版発行　価390円

発行者　宮本信太郎

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　求竜堂印刷株式会社
口絵印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
製本　協和製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

カラマゾフの兄弟 II

第八篇　ミーチャ　5
第九篇　予審　110
第十篇　少年たち　192
第十一篇　兄イワン　253
第十二篇　誤審　377
エピローグ　500
年譜　527

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

カラマゾフの兄弟 Ⅱ

第三部（つづき）

第八篇　ミーチャ

一　商人サムソーノフ

いっぽう、グルーシェンカが新生活へ飛び去るにあたって最後の挨拶を伝えるようにと《命令し》、ほんの一時期にすぎない自分の愛を永遠に忘れないでほしいと注文したその相手――ドミートリイ・フョードロヴィチは、ちょうどその頃、彼女の身に起こった新しい出来事のことを何も知らずに、相変わらず恐ろしい混乱と奔走の真っただ中にいた。この最後の二日間、彼はのちに述懐したとおり、実際、脳炎でも起こしかねないような、想像を絶した状態におちいっていたのである。アリョーシャはきのうの朝ついに彼を探し出すことができなかったし、兄のイワンも同じ日に料理店で彼と落ち合うことができなかった。下宿先の人々は、彼の言いつけを守って行く先を隠していた。のちに彼が語った言葉によると、彼は《運命と戦って自分を救うために》この二日間、文字どおり四方八方へ飛びまわり、たとい一分間でもグルーシェンカから目をはなして遠出するのが恐ろしかったにもかかわらず、ある緊急な用事のために何時間か町を留守にすることさえあったのである。こうしたことが詳細に、記録の形で明るみに出たのは後になってからだが、今はただ彼の運命に突然おそいかかったあの恐ろしい災難（カタストロフ）に先立つ彼の生涯の恐怖の二日間の出来事のうち、ぜひとも必要な事柄だけを事実の面から示唆するにとどめておこう。

グルーシェンカはほんのわずかな期間ではあるが、真実こころから彼を愛した。このことは事実である。だが同時に彼を時によると本当に残酷に、情け容赦なく苦しめもした。重要なことは、彼に彼女の気持がさっぱりつかめなかった点にある。機嫌を取っておびき出すことも、腕ずくでなびかせることもできない。そんなことでは決して彼女は屈服しないばかりか、悪くすると腹を立ててすっかり背を向けてしまうに違いない。それは当時の彼にもはっきりとわかっていた。彼は当時、彼女もまたある内心の戦いに悩んで非常なためらいを感じているのではないか、決心しようにも決心できずにいるのではない

かと、事態をきわめて正しく推測していた。それゆえ、彼が消え入らんばかりの思いで、時によると自分と自分の情熱が彼女にはかえって憎悪の種になるに違いないと考えたのも、根拠のないことではなかったのである。実際ことによるとそうだったかも知れない。しかしグルーシェンカがいったい何を思い悩んでいるのかという点になると、彼はやはり見当がつかなかった。彼の側から言えば、自分を苦しめているすべての問題は、《このおれか、親父のフョードルか》という、ふたつにひとつの決定でしかなかったのである。

ついでながら、ここでひとつの確固たる事実を述べておく必要がある。彼は親父のフョードルが、必ずグルーシェンカに正式の結婚を申し込むに違いないと（もしまだ申し込んでいなければの話だが）信じて疑わなかった。そうしてまたあの色気違いの老人がわずか三千ルーブリですますつもりでいるなどとは、一瞬たりとも信じなかったのである。ミーチャがこういう結論を下したのは、グルーシェンカと彼女の気性を知っていたからである。とすれば、グルーシェンカの苦悶やためらいがすべて、同様にふたりのうちのどちらを選ぶべきか、どちらがさきざき有利であろうかというこの一点をめぐって生じたものに違いないと、時どき青年が思ったのも無理はない。例の《将校》、つまりグルーシェンカの生涯にとって宿命的な男、彼女がその到着をあれほどの興奮と恐怖の入りまじった気持で待ちこがれていたあの男が近々帰って来るということは、奇妙なことにこの数日のあいだ彼は考えようとも思わなかった。なるほどこの数日間グルーシェンカがこのことを黙っていたのは事実である。しかしひと月ほど前に昔の誘惑者から手紙が届いたことは、彼女自身の口から聞いて十分に承知していたし、また部分的にはその手紙の内容も知っていた。そのときグルーシェンカは、ふと意地の悪い気持を起こしてその手紙を彼に見せたのだが、驚いたことに彼はその手紙にほとんど何らの価値も認めなかった。それがなぜかを説明するのは、非常にむずかしいことに違いない。ことによると、この女性をめぐる血をわけた父親との見苦しい恐ろしい争いに打ちひしがれた彼としては、少なくともその時にはそれよりも恐ろしい危険なことを何ひとつ予想することができなかったという、ただそれだけのことだったかも知れない。五年も姿をくらましたあげく、どこからか不意に飛び出して来た求婚者、――とりわけその求婚者が近々ここへやって来ることなど、彼は頭から信じなかった。それにミーチャが見せてもらったその《将校》の最初の手紙には、この新しい競争者の来訪のことは非常に漠然と書かれているにすぎなかった。その手紙はきわめて曖昧で、大げさで、センチメンタルな言葉でいっぱ

いだった。注意せねばならないのは、グルーシェンカがそのとき到着について多少とも確定的なことの書いてある手紙の最後の何行かを隠して見せなかったことである。そのうえ、これは後に思い出したことであるが、ミーチャはその瞬間グルーシェンカの顔に、このシベリアからの手紙に対する軽蔑が思わず誇らしげに浮かぶのを捕えたような気がした。その後グルーシェンカはこの新しい競争者との交渉がどう進んでいるのかを、もはや何ひとつミーチャに知らせようとはしなかった。こういうわけでミーチャは、時がたつにつれてこの将校のことをすっかり忘れてしまったのである。

彼はたといどんなことが起ころうとも、どんなふうに事態が変わろうとも、フョードルとの決定的な衝突が今や目前に迫っていて、他の何よりも先にそれが決着を見るに違いないと、そのことばかり考えていた。消え入らんばかりの気持で、彼は今か今かとグルーシェンカの決心がきまるのを待ち、そうしてその彼女の決心が不意に、霊感によって生じるに違いないとたえず信じていた。もし彼女が突然、『あたしを捕まえて頂戴、あたしは永久にあんたのものなの』と言ったら、――それで万事は決着するのだ。すぐさま彼女を引っさらって、世界のはてへ連れて行く。おお、すぐさま、できるだけ、できるだけ遠くへ、世界のはてとは言わぬまでも、どこかロシアのはてへ連れて行き、そこで彼女と結婚して、ここの者にも向こうの者にも、どこの誰にも知られないように、人目を忍んでひっそりと暮らすのだ。その時こそ、おお、その時こそ、ただちにまったく新しい生活がはじまる！その一新された、別の、今度こそ《善行にみちた》生活のことを（《必ず、ぜひとも善行にみちた》生活でなければならぬ）、彼はたえず無我夢中で空想していた。彼はこの復活と一新を渇望していた。みずから好んではまり込んだ醜悪な泥沼があまりの重荷となっていたので、彼はそういう場合に立ちいたった多くの人々と同様に、何よりもまず土地が変わりさえすればと思い込んでいた。あの連中さえいなかったならば、こんな環境でさえなければ、こんないまわしい土地から飛び出しさえすれば、――何もかもが生まれ変わって、一新するに違いない！これが彼の信念であり、また渇望の的でもあった。

しかしこれはただ問題が幸運な決着を見た第一の場合にすぎなかった。決着のつき方はもうひとつあって、これとは別の、恐ろしい結末も予想されるのである。もし彼女が突然、『帰って頂戴、あたしたった今フョードル・パーヴロヴィチと話がついて、あの人のところへお嫁に行くことに決めたの。あんたにはもう用はないわ』と言ったとしたら――その時は……おお、その時は……。しかしミーチャは、その時はどうなるか知らなかった。最

後のぎりぎりの瞬間まで知らなかった。このことを彼のために言っておかねばならない。彼は明確な意図を持っていなかった。犯罪などは考えてもいなかった。彼は見張りをし、スパイをし、苦しんではいたが、しかしなお自分の運命の第一の幸運な結末に対してのみ準備をしていたのだ。他のあらゆる考えをむりに追い払ってさえいたのだ。ところがここに早くもまったく別の苦悩が芽生えていた。まったく新しい、第二義的な、しかし同様に宿命的な、解決し得ぬある事情が生じていたのである。

その事情とは、もし彼女が『あたしはあんたのものなの、どこへでも連れて行って頂戴』と言った場合、いかにして彼女を連れ出すかということである。そのための費用は、金はどこにあるのか。それまでの何年かひきつづきフョードルから出ていた彼の全収入は、ちょうどそのとき尽きはてていた。もちろんグルーシェンカは金を持っている。だがその点についてミーチャの心には、突然、恐ろしい誇りが頭をもちあげた。彼は自分の力で彼女を連れ出し、彼女の金ではなく自分の金で彼女との新生活をはじめたかった。彼女の金を借りることなどは想像もできなかったし、そう考えただけで彼は苦しいほどの嫌悪にかられた。もっともここではこの事実を長々と説明したり分析したりせずに、ただその時の彼がそういう心境だったと述べておくだけにしよう。それはまた、彼がカチェリーナの金を泥棒のように着服したという良心のひそかな苦しみから、間接的に、いわば無意識的に生じた心境かも知れない。『ひとりの女性に対してすでに卑劣な真似をしているのに、そんなことをすればもうひとりの女性に対してまで卑劣漢になってしまうじゃないか』後に告白したように、彼はその時こう考えたのである。『それにグルーシェンカが知ったら、そんな卑劣な男はいやだと言うだろう』だがそうなると、どこで費用を調達したらいいのか、どこでその運命的な金を手に入れたらいいのか。それができなければ、すべては失敗して水泡に帰してしまうのだ。『それもただ金が足りないという理由だけで。ああ、何という恥辱だ！』

ひとつ先まわりをして言っておこう。問題は彼がことによるとその金をどこで手に入れたらいいかを知っていたかも知れない、その金がどこにあるかを知っていたかも知れないというこの一事である。だが今は、これ以上くわしくは語るまい。やがてすべてが明らかになるのだから。だが彼の主な不幸はこの点にあったのだから、漠然とではあるが、これだけは言っておかねばならぬ。つまりこのどこかにある資金を手に入れるためには、その金を手に入れる権利を得るためには、まずその前に三千ルーブリをカチェリーナに返さなければならなかったのだ、――さもなければ、『おれはすりになる、卑劣漢に

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

なる。おれは卑劣漢のまま新生活をはじめたくない』こうミーチャは決心した。従ってもし必要なら全世界をひっくり返してもかまわない、ただあの三千ルーブリだけは何がなんでも真っ先にカチェリーナに返さなければならないと腹を決めたのである。彼が最終的にこう決心したのは、いわば彼の生涯の最後の数時間、すなわち二日前の夕方、路上でアリョーシャと最後に会った時である。それはグルーシェンカがカチェリーナを侮辱した直後のことだが、ミーチャはその話をアリョーシャの口から聞くと、自分が卑劣な男であることを認めて、《もしそれが多少とも彼女の気持を軽くするなら》、そのことをカチェリーナに伝えてほしいと言いつけた。弟と別れた彼は、その夜いつもの狂乱状態におちいって、《たとい誰かを殺して強奪してでも、カーチャ（カチェリーナの愛称）にだけは借金を返さなければならない》と感じた。『殺害され強奪された男、いや、全人類に対して、強盗、殺人者となってシベリアへ送られようとも、カーチャにあの男は自分を裏切って自分の金を盗み、その金で善行にみちた生活をはじめるためにグルーシェンカと駈け落ちしたと言われるよりはいい。それだけは堪えられない！』歯ぎしりをしてミーチャはこう口走った。実際、《これではしまいに脳炎を起こすぞ》と時々彼が思ったのも無理はなかった。だが、今のところ彼はなおも戦いつづけていたのである。……

ここにふしぎなことがひとつある。こういう決心を固めた以上、もはや絶望いがい何ひとつ彼には残されていないと思うのが当然であろう。なぜならばそのような大金を、彼のような一文なしの男がどこで急に手に入れることができるというのか。ところが彼は、最後までその三千ルーブリはきっと手にはいる、ひとりでにはいって来る、いざとなれば天からでも降って来るだろうと期待していたのである。もっともこういうことは、ドミートリイのようにこの年まで親の遺産を湯水のように浪費して来て、金もうけの方法をまったく知らない人々にはえてしてありがちなことである。おとといアリョーシャと別れた直後から、彼の頭のなかには恐ろしく現実ばなれのした旋風が吹きあれて、彼の思考を混乱におとしいれてしまった。こうして彼は最も無謀な企てから着手することになったのである。ことによると、こういう場合こういう人々は、最も現実ばなれのした不可能な企てを、まず最初に最も実現性のあることと思うのかも知れない。

彼は突然、グルーシェンカの旦那（ペーパン）である商人サムソーノフのところへ行って、ある《計画》を話し、その《計画》と引き換えに一挙に必要な金額を彼から引き出そうと決心した。この計画の商業的な価値については、彼はいささかの疑惑も抱かなかった。彼が疑惑を抱いたのは、

もしサムソーノフが商業的な面をはなれて問題を見た場合、このとっぴな行動をどんなふうに眺めるだろうかという一点であった。ミーチャはこの商人を顔だけは知っていたが別に面識はなく、口をきいたことは一度もなかった。しかしなぜか彼は以前から、もしグルーシェンカが堅気になって《信頼できる男》と結婚するならば、この色好みの老人も、片足を棺桶に入れている今となっては全く反対しないに違いないという信念を抱いていた。いや、反対しないばかりではない、老人自身がそれを希望していて、そういう機会があれば、進んで協力するかも知れないのである。何かそういう噂を聞いていたのか、それともグルーシェンカの言葉の端からそう考えたのか、いずれにせよ彼はまたこの老人が、恐らくグルーシェンカの相手としてはフョードルよりも自分のほうをふさわしいと思うに違いないと決め込んでいた。ことによるとこの物語の多くの読者は、そんな虫のいい助力の期待や、自分の花嫁をその旦那から奪い取ろうという目論見が、いくらドミートリイでもあんまり乱暴すぎると思われるかも知れない。しかし私に言えることは、グルーシェンカの過去がミーチャには完全に過ぎ去った昔の出来事と思われたということだけである。彼はこの過去を限りない同情の気持で眺めていた。そうしてひとたびグルーシェンカが『あたしはあなたを愛しています、あなたと結婚します』と言ってくれさえすれば、たちまちまったく新しいグルーシェンカがそこに生まれ、彼女と一緒に自分もまったく新しい人間に生まれ変わって、もはや何らの悪癖もなく、善行にみちあふれることになるのだ、そうしてふたりは互いに赦し合って新生活をはじめるのだと、情熱の炎を燃やして決めていたのである。クジマー・サムソーノフについて言えば、彼はこの老商人をグルーシェンカのすでに消滅した過去における、彼女の生活にとっての宿命的な男であると考えていた。だが、彼女が一度も愛したことがなく、また何よりも重要なことであるが、老商人自身がすでに《過ぎ去って》、生活を終えてしまった以上、今はもうまったく存在していないわけである。そればかりか、今やミーチャはこの男を人間と考えることさえできなかった。なぜならば、この町では周知の事実だが、この老人が今では病気の廃人にすぎず、グルーシェンカに対していわば父親的な関係を保っているだけで、もう久しく、ほとんど一年近く以前の関係にはなかったからである。しかしいずれにせよ、ミーチャの側にも無邪気にすぎた面は少なくなかった。さまざまな欠点を持ってはいたものの、もともと彼は非常に無邪気な男だったのである。わけてもこの無邪気さのために、彼は老商人が臨終の床でグルーシェンカとの過去を心から後悔しているに違いない、また今ではあの無

害な老人いがい彼女には庇護者も忠実な友人もいないのだなどと大まじめで確信していたのである。

アリョーシャと野原で話し合ったあと、ミーチャはその夜ほとんど一睡もしなかったが、次の日の朝十時ごろ、サムソーノフの家を訪ねて取り次ぎを頼んだ。老商人の家は、古い、陰気な、大そうだだっ広い二階家で、別棟や離れなどがあった。一階には家族もちのふたりの息子と、主人の大そう年取った妹と、未婚の娘とが暮らしていた。離れにはふたりの番頭が住んでいたが、そのひとりはやはり大家族を抱えていた。子供や番頭たちが狭い窮屈な暮らしをしているのに、老商人は二階をひとりで占領して、自分の身のまわりの世話をしてくれる娘さえも二階で暮らすことを許さなかった。この娘は持病のぜんそくに苦しんでいたにもかかわらず、一定の時刻と、時間かまわず呼鈴が鳴るたびに、二階の父のところへ駆けあがって行かねばならなかった。その《二階》には大きな立派な部屋がたくさんあり、マホガニーの不恰好な肘掛椅子や普通の椅子が壁ぎわに長い退屈な列を作って置かれ、おおいを掛けたクリスタル・ガラスのシャンデリアや、壁の陰気な飾り鏡など、昔の商家の習慣どおりの家具調度をととのえてあった。これらの部屋はどれもがらんとして人気がなかった。病める老人が奥まった小さな寝室に引きこもり、頭巾をかぶった老婆の女中と、控えの間の長持の上に待機している《若い衆》がその世話をしているだけだったからである。老人は足にむくみが来てほとんど歩くことができず、ただ時たま皮張りの肘掛椅子から体を起こしては、女中の老婆につかまって部屋の中を二、三度歩きまわっていた。この老婆に対しても彼は厳格で、めったに口をきかなかった。

《大尉》の来訪が取り次がれると、彼はすぐに追い返せと命じた。しかしミーチャは執拗にもう一度取り次ぎを頼んだ。サムソーノフは若い衆に向かって、「どんな様子をしているか、酔っぱらっているのではないか、乱暴を働く恐れはないか」などと詳しくたずね、「しらふですが、帰ろうといたしません」という答えを聞いた。老人はふたたび追い返せと命令した。ミーチャはそれを予期してわざわざ紙と鉛筆を持って来ていたので、紙切れに一行だけ『アグラフェーナ・アレクサンドロヴナ（グルーシェンカの名前と父称）につき緊急の用事あり』とはっきり書き、それを老人のところへ持たせてやった。老人はしばらく考えてから若い衆に客を広間へ通すように命令し、老婆を階下の次男のところへやって、すぐに二階へ来いと言いつけた。この次男はひげをそってドイツ風の服を着た（父のサムソーノフはロシアの長衣（カフタン）を着て、ひげをたくわえていた）、身の丈二メートルあまりの馬鹿力を持った大男であるが、すぐさまおとなしく二階へあがって来た。

家じゅうの者が父に対してはおびえていたのである。老商人がこの青年を呼んだのは、別に大尉に対する恐怖心からではなかった。彼は決して臆病な性格ではなく、ただ念のために証人を置いておこうと思ったのである。やがて息子に手を取られた老人が、若い衆を従えてよろよろしながら広間へ出て来た。彼はあるかなり激しい好奇心を感じていたに違いない。ミーチャが待っていたこの広間は、とても大きい、陰気な、気が滅入りそうな部屋で、露台のついた上下二段の窓があり、壁は《大理石張り》で、おおいを掛けた巨大なクリスタル・ガラスのシャンデリアが三つ吊るしてあった。ミーチャは入口のドアのそばの小さい椅子に腰かけて、神経質にじりじりしながら自分の運命を待っていた。ミーチャの椅子から二十メートルほどはなれた反対側の入口に老人が姿を現わすと、彼は急に立ちあがって、例のしっかりした軍隊式の大股な歩調でつかつかと老人に歩み寄った。彼の服装は作法どおりで、フロックコートを着てボタンを掛け、シルクハットを手に持って、黒の手袋をはめていた。それは三日前に僧院の長老のもとを訪ねて、父のフョードルや弟たちとの家族会議にのぞんだ時とそっくり同じ服装だった。老商人は傲然たる厳しい顔つきで立ったまま彼を待ち受けた。ミーチャは彼に近づくあいだに、相手にすっかり見すかされてしまったのを感じた。もうひとつミーチャをひどく驚かしたのは、最近めっきりむくみのきたサムソーノフの顔で、ただでさえ厚い下唇は、今ではホットケーキをぶら下げたように見えた。傲然たる顔つきで無言のまま客に頭を下げると、老商人はソファのそばの肘掛椅子を相手にすすめ、自分は息子の手につかまって苦しそうにうめきながら、ミーチャの真向かいのソファにゆっくりと腰をおろしにかかった。その苦しげな努力を見ると、ミーチャはたちまち後悔と慇懃な羞恥を心に感じた。自分がこんな迷惑をかけたこの威厳たっぷりな人物を前にして、わが身のくだらなさがつくづく感じられたのである。

「私にご用とおっしゃるのは何でございますな」やっと腰をおろすと、老人はゆっくりと、一語一語はっきり区切って、厳しいけれども丁寧な口調で言った。

ミーチャはぎくりと身をふるわせて立ちあがりかけたが、ふたたび腰をおろした。それから無我夢中になって、身ぶり手ぶりをまじえながら、大声で早口に、神経質に話しはじめた。それは明らかに破滅の一歩手前まで追いつめられて最後の活路を求め、失敗したらただちに投身自殺でもしようという男の様子だった。サムソーノフ老人も一瞬の間にそれを見て取ったに違いないが、その顔はまるで偶像のように冷たく微動だにしなかった。

「サムソーノフさん、あなたはたぶん私が父のフョード

ル・カラマゾフと問着を起こしていることを、今までに何度もお聞きおよびのことと思います。父は私の生母の遺産を横領したのです。……今では町じゅうがこの噂で持ちきりです。……何しろここの人たちは必要のないことで大騒ぎをしますからね。……そればかりではなく、このことはグルーシェンカの口からも、……いや、これは失礼、アグラフェーナ・アレクサンドロヴナでした、……私の尊敬してやまぬあのアグラフェーナ・アレクサンドロヴナの口からもお耳に……」ミーチャはこんなふうに始めたが、たちまち言葉につまってしまった。もっとも私は、彼の言葉をそのままかかげることはやめて、その概要をお伝えするにとどめよう。話の要点は、彼ミーチャが三月前に県庁所在地の町へ出かけて行って、そこの弁護士にとくに相談をしたというのである（彼は特別にと言わずに《とくに》と言った）。「それはサムソーノフさん、パーヴェル・パーヴロヴィチ・コルネプロードフという名高い弁護士なのです。あなたもたぶんご存じでしょう？　広い知識の持ち主で、ほとんど国家的な人物です。……あなたのことも知っていて、……とてもほめていました。……」ここでミーチャはまた言葉につまった。しかしたびたび言葉につまりながらも彼は話をやめずに、すぐさまそこを飛ばして先へ先へと進んで行った。弁護士のコルネプロードフは、くわしくたずねたり、ミーチャが提示することのできたいろいろな書類を検討したのち（この書類についてのミーチャの表現は曖昧で、彼はこの個所をとくに急いですませた）、チェルマーシニャ村については、これは母の遺産として彼ミーチャの所有に帰すべきものであるから、実際に訴訟を起こすことができるし、それによってあの悪辣な老人にひと泡ふかせることができるはずだと言ったというのである。……「なぜならば出口はつねにあり、法律家はその出口を知っているからです」ひと言で言えば、父フョードルからさらに六千ルーブリ、いや七千ルーブリの不足額を受け取ることさえ期待できる。なぜならば、チェルマーシニャ村は少なく見ても二万五千ルーブリ以上、いや確かに二万八千ルーブリ、「いや三万です、サムソーノフさん、三万ルーブリの値打ちはありますからね。ところが、どうでしょう、私はあの残忍な男からまだ一万七千ルーブリも引き出しちゃいないんです！……」ところが私つまりミーチャは、法律のことが苦手だものだから、その時はその問題を放棄してしまったのだが、この町へ来てみると、驚いたことに逆にこちらが反訴される羽目になった（ここでミーチャはまたもやまごついたが、ふたたび一気に話を飛ばした）。「そういうわけですから、サムソーノフさん」と彼は言った。「あの悪党に対する私のすべての権利を引き取るおつもりはな

いでしょうか、私には三千ルーブリだけ下さればそれで結構です。……あなたはどうころんでも訴訟に負ける恐れはない、それは私が名誉にかけて、名誉にかけて誓います。それどころか、あなたは三千ルーブリのもとでで六千ルーブリももうかるのです。……」ただ重要なことは、《今日じゅうに》決着をつけねばならぬことであった。「私が公証人のところへ行くなり何なり……、ひと言で言えば、私は何でもする覚悟でいるのです。あなたが要求なさる書類は全部さしあげます、……どんな署名でもします、……ですからその文書を今すぐ作成していただけませんか、できることなら、できることなら今朝のうちに。……そうして引き替えにその三千ルーブリを下さるとありがたいのです。……何しろあなたに対抗できる資本家はこの町にはひとりもいませんし、……そのことによって私を救って下さる、つまりあるきわめて立派な行為のために、そう言えるならきわめて高尚な行為のために、この哀れな男を救って下さることになるのです。……と申しますのは、私はあなたがあまりにもよくご存じの、あなたが父親がわりにお世話しているある女性に対して、この上なく立派な感情を抱いているのです。もし父親がわりのお世話でなかったならば、そうでなかったならば、私はこちらへ伺ったりはしなかったでしょう。何なら申します、ここで三人が鉢合わせをしたのです、何しろ運命というものは、恐ろしいものですからね、サムソーノフさん。リアリズムです、サムソーノフさん、リアリズムです！　いや、あなたはとうの昔に除外すべきなのですから、ふたりが鉢合わせしたわけです。私の表現はまずかったかも知れませんが、私は文学者じゃないのです。つまりひとつの額は私のので、もうひとつはあの悪党のです。ですから選んで下さい。私か、それともあの悪党か。今やすべてがあなたのお手に握られています、――三つの運命と、二つのくじが。……お許し下さい、私は支離滅裂になってしまった。しかしあなたはわかって下さいますね、……あなたのご立派なお日を拝見すれば、あなたがわかって下さったことがわかります。……もしわかって下さらなければ、私は今日にも投身自殺をします、そうなんです！」

ミーチャはこの《そうなんです》という言葉で愚劣な話を不意に打ち切った。そうしていきなり椅子から立ちあがると、自分の馬鹿げた提案に対する返事を待った。最後の一句を口にすると同時に、彼は突然すべてが失敗に終わったことを、何よりも自分が恐ろしく馬鹿げたことをしゃべり散らしたことを感じて絶望的な気持になった。『おかしいぞ、ここへ来る途中はすべてがすばらしいことと思われたのに、今はこのとおり馬鹿げたことになってしまった』――不意にこんな考えが彼の絶望的な

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton